

「湾岸戦争」の意味するもの

崩壊に向かう「中東諸国体制」—近代世界システム

反戦闘争で問われた左翼の主体的危機

一月十六日の米軍のイラク空爆によって始まった湾岸戦争は、約二時間の戦闘を経て二月末イラク軍の完全敗北、クウェート撤退によって終結した。昨年八月二日未明のイラク軍のクウェート侵攻に端を発した湾岸危機は、イラク軍のクウェート占領とこれに對峙し、米軍がサウジアラビアに大規模な展開する

感か世界を被っているといっても過言ではないだろう。世界情勢の急速な流動化に對し、日本における左翼主体の危機は極めて深刻である。総評の崩壊の中で、そして東欧の「民主化」—いわゆるマルクス・レーニン主義の破産という事態の中で解き放たれた新しい左翼は、今回の湾岸戦争をめぐる情勢の中で、またしても有効な対応策を見いだすことができないままに終わった。政治的構想力の貧弱さにおいて、また行動の硬直さにおいてもはや「御用済み」といってもおかしくない

状況であった。無論われわれとて例外ではない。これに代わって、行動を起し、論陣を張ったのは市民運動の人々であった。われわれはこれらの行動を高く評価し、かつ参加してきた。だが同時に「今こそ憲法九条を世界へ」に集約される政治的主張については疑問を持っている。やはり今一度、左翼政治主体の再構築として問題をたててみよう。そのひとつとして、湾岸戦争に對し、戦争の性格とその持つ意味、また日本におけるこの間の反戦行動の主張について検討する。

湾岸戦争の性格を考察するには、最低3カ月の準備が必要であり、これだけの部隊編制が人工衛星などで察知できないはずはないこと、また侵攻直前の在米兵員を動員したが、このために

対し、アメリカは「モクランタキ」を続けていかねばならない。アメリカの軍事展開は新しいL.I.C.を生み出す。その例証こそ湾岸戦争である。ポスト冷戦を最初に示したのはイラン革命であった。アメリカも連も全く影響力行使しえないイランの動きをこみかきつた連、欧米が一体となってテロ入れたのがイラク・フセイン政権であった。今度は軍事的に巨大化したフセイン政権が地域的な覇権国家として立ち現れたというように、

「どこかで戦争が起る必要があった」

湾岸戦争の性格を考察するには、最低3カ月の準備が必要であり、これだけの部隊編制が人工衛星などで察知できないはずはないこと、また侵攻直前の在米兵員を動員したが、このために

起したこの戦争もまた、地域的「熱戦」によって軍力を展開し、その力をもってバックス・ロー・インテンシティ・コンフリクトの略で、低強度紛争と訳される。第三世界の解放闘争、ゲリラ戦からテロ、麻薬問題までをすべてL.I.C.としてくり、このL.I.C.こそが世界の秩序を乱し、アメリカの権益を脅かすものだと認識の下に、これへの軍事的対抗をアメリカの軍事戦略の根幹にすえた。従来のソ連との全面戦争を根幹にすえたそれからの大転換であり、八〇年代中盤からの転換は始まり、八七年六月には陸海空三軍の特殊部隊を「特殊行動軍」と統合している。グレナダ、リビア、パナマへの侵攻を先行演習とするなら、湾岸戦争はこの軍事戦略の全面的な発動であった。

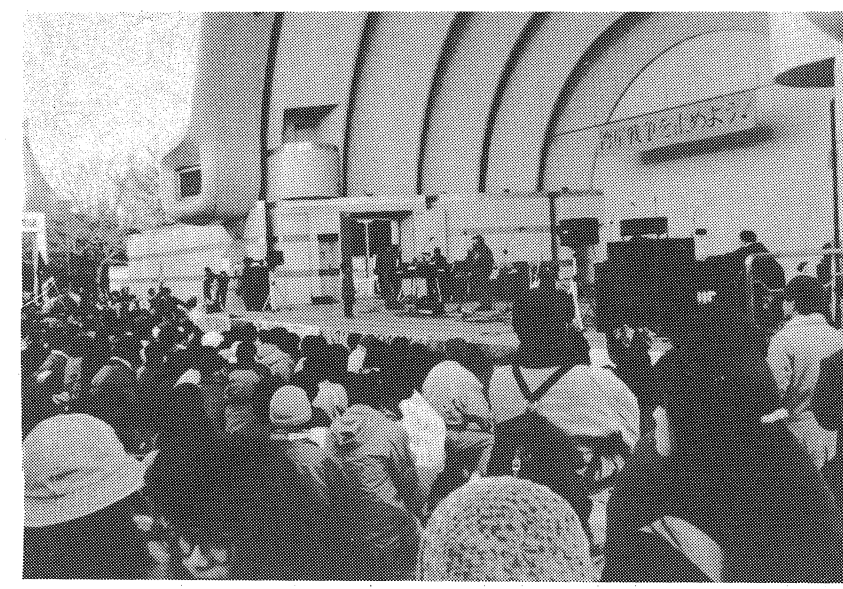
加速する「中東諸国体制」の瓦解
湾岸危機の歴史の意味を考察するにあたってキーワードは「中東諸国体制」である。湾岸危機は中東諸国体制の危機、崩壊局面を現している。中東諸国体制とは英仏二国のヘゲモニーの下にアラブ諸国とイスラエル、トルコなどを民族国家として分立させ、帝国主義の支配を維持させようというものである。しかし西歐的な民族国家が、資本主義、市民社会、中産階級の生成などを基本としたのに対し、中東ではそのような社会的、文化的基盤はなく、上から人為的に西歐的な国家体制をかぶせるものとなつた。アラブ民族社会と近代国民国家原理のミスマッチの中で、アラブに根ざした自主的な政治的編成を求め、帝国主義の大国支配—その装置としての中東諸国体制とぶつかる運動が民衆的基盤をもって巻き起こっている

越境する社会運動—
国際人民連帯の運動を
国内に目を転ずると、この半年で自公民の協力をバックとした「小沢体制」による海外派兵の動きが強まっている。対米追従と既成事実の積み重ねによる解釈改憲という伝統的な手法を

世界システムと民衆の闘いを分析する視点とそれが成立するに値する国際的な運動的基盤が必要である。にもかかわらず、これを経過せずに、特殊日本の状況で成立している九条を、しかもそれがどこか空洞化してきたことの総括を抜きに国際的普遍原理へとおぼたすことはある種の大国主義ではないか。日本帝国主義が海外派兵へと全力を傾注している今、これを阻止する闘いは急務であり、それは多様な共同行動のもとにより大きく組織されねばならない。同時に、国境を越える社会運動の連帯の形成、反戦闘争の再構築が不可欠であり、また時代を透視し、近代世界の枠組を越える政治的構想の構築こそが問われている。



第16号 編集 「風をよむ」編集委員会
1991. 4. 22 / 定価 100円 発行 共産主義者同盟首都圏委員会



しかし、新秩序の骨格がL.I.C.であるならば、つまりなにをかもL.I.C.としてくり、かつこれに軍事的にしか対処しえないというアメリカの決定的弱点もある。アメリカがL.I.C.として認識しているものは、「中核—周縁」構造としての資

来る五月一日、沖縄は日本復帰一九年を迎え、いよいよ来年の二〇年の節目に向かいます。復帰二〇年は、沖縄にとってもわれわれにとっても大きな節目になります。沖縄では、昨年一月に大田革新新政が登壇し、これを支える沖縄社大党も新しく生まれかわるようになっています。こうした状況は復帰二〇年目

五・一五沖縄集会へのご案内
組む必要がありませんが、問題はその担い手、主体の問題であります。県知事選の勝利は社大党という土着政党—地域政党の存在意義を新しく全国に示すものでした。社大党がこうした課題に沖縄自立の展望をかけて取り組むと同時に、われわれも現在展開されている地方選や地域住民運動を通して、自らの地域政治勢力を形成し、連帯する必要がありましよう。こうした新しい政治勢力づくり抜きには復帰二〇年の沖縄を理解し、連帯することは出来ません。

要綱
名称 沖縄復帰二〇年と新生社大党の展望をめぐり五・一五東京集会／日時 五月一日(水) 6:30~9:00 / 場所 中央労働会館第一A室 / 講演「復帰二〇年と社大党の展望」/ 与那嶺義雄氏(社大党、西原町議) / 問題提起「復帰二〇年に向かっている政治勢力づくり抜きには復帰二〇年の沖縄を理解し、連帯することは出来ません。」
主催 五・一五東京集会実行委員会 / 会場費 五〇〇円

政治日程
4月27日(日) 海部首相のASEAN訪問に反対する緊急行動 / PM 3:00 宮下公園 / PM 6:00 〇代々木八幡区民会館 / 主催 同実行委
4月28日(日) スリーマイル、チエルンブイリ、福島、美浜—原発はもうおしまい / 4・29大集合 / PM 0:30 宮下公園 / 呼びかけ 原発とめよう / 東京ネットワーク
4月29日(月)「みどりの日」 / 京都植樹祭に反対する4・29集会 / PM 1:00 〇代々木八幡区民会館 / 主催 4・5月行動

「戦争・国連・派兵を問うフォーラム」

繰り越された多くの問題

三月三〇・三十一日、二日間にわたって、東京労働福祉会館において「戦争・国連・派兵を問うフォーラム」(反戦フォーラム)が行われた。参加者は三〇〇人から四〇〇人程度。二日目、それも最後の全体集会における六つの分科会(①湾岸戦争とアラブ・中東世界の解放・国連にできないこと、私達にできること、②流動するアジア拡大する日本の侵略を撃つ、③地域から戦争・基地を考える、④石油と暮らしを考える、⑤反戦運動と国連・憲法・天皇制一戦

市民平和訴訟 戦争に税金を払わない



三月四日、全国五七一人の原告によって、①九〇億ドルの戦費支出の差止め、②自衛隊機派遣の差止め、③一人当たり一百万の慰謝料の支払い、④三項目を請求の趣旨とする提訴が、国を相手として東京地裁で行われた。同時に大阪でも、同様の趣旨で二七九人の原告によって、大阪地裁に提訴が行われた。また名古屋でも、提訴に向けて準備中という。一月七日以来の「湾岸戦争」は三月十四日から、の地上戦をへて同月十八日、実質的停戦に至ったが、その間

「25年闘って、もう25年闘ってみよう」

3・17三里塚現地集会

早春の寒風がただよう三里塚。現闘本部前で、現地集会が開かれた。好天に恵まれ参加者は500人くらい。司会の小泉さんの心なご挨拶で始まった集会だが、「地域振興連絡協議会」の問題が終始引掛かって、スツキリしないものが残った。同盟からは石井武さん、小川源さん、熱田さんが発言した。熱田さんからは、昨年一月末の成田治安法による「横堀団結の誓」除去攻撃の際、隣接する熱田さんの畑が千葉県警、空港公園によって破壊されたことに対する「横堀新畑 損害賠償訴訟」を起したことの報告と支援の訴えがあり、元気な印象が残った。「協議会」として準備している「公開シンポ」については集会的な支離から公然と批判が出されたほか、現闘をおく七団体連名の批判の共同声明がビラで出された。私達が同盟との団結を求め、同盟の人々の奮闘に闘いに心を寄せ、いかに少くも変わらなければならぬ。気掛かりである。同盟内の公明正大で民主的な討論によって、とりわけ用地内の人々の意見を尊重することによって同盟の意志決定がなされることを望むた



「湾岸危機」と私達にできること 《その2》

海外派兵反対運動と国際連帯のありかたは?

「三多摩パレスチナと連帯する会」の小田切芳政さんに聞く

アラブの大義と反帝闘争

「湾岸危機」とパレスチナ解放運動とは直接にはつながらないように思いますが、イスラエルの存在そのものに端的に象徴されるアラブ世界への帝国主義の介入とこれに対するアラブ人民の抵抗という歴史的文脈の中で、フセイン支持を叫ぶパレスチナの人々の心も理解することが出来るのではないかと

小田切 小田切 小田切

勝てない。イスラエルは既成事実としてとんとん居座っているだけで、ガザ地区、ヨルダン川西岸など占領地を拡大してしまっている。パレスチナ人は強い危機感をもっている。他方アラブ支配者層においては、自己の現有する石油権益とか、帝国主義とのつながりとか、あるいはイスラエルの強大な力、またそれを支えている世界帝国主義勢力の力というものによって、かつてのような一枚盾としてのパレスチナ支援というふうにしてそこに住んでいた二〇〇万人ものパレスチナ人を追い出し、世界中からユダヤ人を集めて、一九四八年イスラエルという「国家」が作られてしまった。ここに今日に至るまで四次にわたる戦争を行わなければならなくなってきた原因がある。

今回アメリカがサウジアラビアの要請に応じて派兵していますが、軍隊の駐留が余り長引くようになると、帝国主義に対する歴史的な反感というものがあから、今度はサウジアラビアのなかの人民の運動を活性化させる可能性がある。特にサウジアラビアは酒はダメ、女性は外出時に顔を隠さなければいけないとか、宗教的戒律の厳しい国ですから、そこに欧米の文化が持ち込まれ風穴を明けてしまつと、非常に複雑な反応を人民の中に生み出すのではないかと、一方では民主化を求める動き、他方ではその反動として民族主義の動きとして、サウジアラビアの支配基盤はそれほど堅固なものではないですから、今後重大な問題を残すことになるかもしれない。

人民の間ではイスラエルの感情は根強く、パレスチナを支援しない支配者は人民に支持されない。しかし四次に及ぶ戦争をやってもイスラエルに一度も

勝てない。イスラエルは既成事実としてとんとん居座っているだけで、ガザ地区、ヨルダン川西岸など占領地を拡大してしまっている。パレスチナ人は強い危機感をもっている。他方アラブ支配者層においては、自己の現有する石油権益とか、帝国主義とのつながりとか、あるいはイスラエルの強大な力、またそれを支えている世界帝国主義勢力の力というものによって、かつてのような一枚盾としてのパレスチナ支援というふうにしてそこに住んでいた二〇〇万人ものパレスチナ人を追い出し、世界中からユダヤ人を集めて、一九四八年イスラエルという「国家」が作られてしまった。ここに今日に至るまで四次にわたる戦争を行わなければならなくなってきた原因がある。

今回アメリカがサウジアラビアの要請に応じて派兵していますが、軍隊の駐留が余り長引くようになると、帝国主義に対する歴史的な反感というものがあから、今度はサウジアラビアのなかの人民の運動を活性化させる可能性がある。特にサウジアラビアは酒はダメ、女性は外出時に顔を隠さなければいけないとか、宗教的戒律の厳しい国ですから、そこに欧米の文化が持ち込まれ風穴を明けてしまつと、非常に複雑な反応を人民の中に生み出すのではないかと、一方では民主化を求める動き、他方ではその反動として民族主義の動きとして、サウジアラビアの支配基盤はそれほど堅固なものではないですから、今後重大な問題を残すことになるかもしれない。

人民の間ではイスラエルの感情は根強く、パレスチナを支援しない支配者は人民に支持されない。しかし四次に及ぶ戦争をやってもイスラエルに一度も

国際人民連帯の可能性

派兵反対との闘いの進め方で、単なる護憲主義や一國平和主義では今かかっている攻撃と闘えない。また派兵を止めていないものの、既にカネモノもヒトも出しているという状況は、私達自身の手もきれない状況ではない。そうした日本の政治的現実については否定しようもないが、消費税の時と同様に既成の政治的取引によってなすしに海外派兵が強制されてしまつてはいないかという危機感をもっている。そうした状況の下で、誰もが共感できるような国際連帯の活動を進めるためには、市民、ボランティア的な民間の協力の可能性はどうだろうか。小田切 人民サイドからの連帯運動については医療活動をはじめとして様々なありかたがある。しかしそれだけに活動が限定されるのであれば十分ではないでしょうか。今回の問題の発端はフシダだった訳ですが、例えばフィリピンで軍によるクーデターがおきて、アキ

継続する戦争の危機 闘いの準備を急ごう

最後にミッドランの「包括和平提案」の可能性を含めた今後の政治的見通しについてコメントをお願いします。

小田切 ミッドラン提案についてはパレスチナ問題をリンクさせている訳ですからアメリカは乗らないでしょう。フシダは国内のユダヤ系の票を逃がしたいので、イスラエルも反対するでしょう。他方イラクについては経済封鎖がたいが効いてはいるようですが、かといって何の成果もなしにクワエートから撤退するということになれば、今度はフセインの地位が危うい。双方の顔を立ててうまく納めるというのには非常に難しく、実際に戦火を交える可能性は大いにあり得ると思います。従って遠くから早々に派兵問題が再度浮上して来る。イスラエルの動向にも注意しなければなりません。年内に三〇万人ぐらいの連のユダヤ教徒を受け入れるとわかっていますが、イスラエルのシャロン住宅相は二〇〇万人がビザを申請

人民的な交流を積極的に進める方法は様々なあると思います。三多摩の地域でも労働者がフィリピンに行つて交流を続けています。感想を聞くことが、日本の進出企業の現地労働者への搾取の実態などを目的にして「日本帝国主義を見た」という実感を得たと言います。だから行ける人は積極的に行って、顔と顔の見え関係で交流を重ねてきたら貴重な経験をそれぞれに運動に生かして欲しいと思います。ただその際に、連帯というのは相手のあることなので私達の思いだけではできませんが、それでも自分の気持ちや政治的な志向性を相手に理解してもらえようというところでキツリ伝えるということが大切だと思います。そうでないと向こうも私達を見ていますから、日本の経済力を背景にした付き合いになりかねないですし、それでは本意に對等の関係での連帯は出来ません。

していると聞いています。この人達が連からテルアビブへの直行便が入って来ている。今パレスチナの人達は多くがイスラエルの社会の底辺で日雇いの労働者として働いている訳ですが、その人達が切り捨てられ、ノ連・東欧からきた人達が肩代わりする。それだけではとても仕事は足りないのだとみな占領地へ行くことになり、そこで直接にインテリファダと対立するようになる。元々イスラエルは旧約聖書を持ち出してきてナイル川からチグリス川まで自分の国だと思っています。そのなかの国には国境というものがありません。あるのは係争線です。従ってどんどん拡張してきています。またどうやらイスラエルを支えている、なかかつ国内に有力な影響力をもつユダヤ系の人々をもつアメリカですから、ミッドラン提案では解決しないと思つて。

「本紙発行の遅れにより、大幅にインテリファダの公表が遅れたことを小田切さんと読者のみなさんにおわびします。一月十七日実施。文責・編集部」